

「人間力」を育成するコミュニティ・スクールの創造

～学校・家庭・地域をつなぐ「鍛える教育」を通して～

春日市立春日中学校

校長 古澤 裕二

こんな手立てによって…

生徒の「やる気」という駆動力を生む「鍛える教育」という方法を、学校・家庭・地域の三者における教育方法として取り入れた。

こんな成果があった！

学力や体力、将来を展望する力、社会のために貢献する力といった総合的な人間としての力、「人間力」を大きく向上させることができた。

1 考えた

平成17年度、春日市教育委員会に勤務していたとき、教育長の山本直俊先生から脳科学者澤口俊之氏の著書「幼児教育と脳」を手渡された。その著書は、脳科学の視点から教育界への優れた提言がなされたもので、目から鱗が落ちる内容だった。以後、澤口氏の著書を熟読し、その中から教育の本質について多くを学んだ。その後、平成23年度福岡県教育センターに勤務した年に、調査研究「鍛える教育」チームがつくられ、その一員となった。「鍛える教育」の概念規定をする際には、迷わず澤口氏の理論をもとに個人的な提案を行った。その提案は本論文の「主題の意味」と同じ内容であり、現在の「鍛ほめ福岡メソッド」の考え方や仕組みのベースとなった。

2 やって見た

平成25年度、春日市立春日東中学校に校長として学校現場に復帰したとき、澤口氏の理論を学校経営方針として実践してみたいと強く感じた。また、このことは、何事にもまじめに努力する春日東中生徒の利点を最大限に生かすことでもあった。そして、平成27年度までの3年間に渡って、「人間力」を育成するコミュニティ・スクールを創るため、次の3つのことに取り組んだ。

- 学校・家庭・地域をつなぐ「鍛える教育」の具体化
- 「鍛える教育」の基盤づくりとしての「運動の効果的活用」の具体化
- 「鍛える教育」の環境づくりとしての「コミュニティ・スクールの実働組織づくり」の推進

3 成果があった！

具体的な成果として、平成25年度に入学した生徒は、3年間で学力偏差値「+5」、体力Tスコア「男子+11」「女子+8」と大きく向上し、キャリアプランニング能力に関するキャリアアンケートの結果も「+0.9」と向上した。また、平成24年度と27年度を比較した不登校生徒の出現率は4%台から2%台に減少した。さらに、平成27年度生徒の地域行事への参加延べ人数は、市内中学校の平均1355名を大きく上回り3250名になった。特に、最大の課題だった体力においては、平成27年度「第29回毎日カップ中学校体力づくりコンテスト」で全国第4位に輝いた。

「人間力」を育成するコミュニティ・スクールの創造

～学校・家庭・地域をつなぐ「鍛える教育」を通して～

1	主題設定の理由	3
	(1) 国の文部行政施策から	3
	(2) 福岡県や春日市が目指す教育から	4
	(3) 春日東中生徒の実態から	5
2	主題の意味	6
	(1) 「人間力を育成するコミュニティ・スクールの創造」とは	6
	(2) 「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』」とは	7
3	研究の目標	8
4	研究の構想	9
	(1) 学校経営の視点	9
	(2) 学校経営構想図	12
	(3) 検証の視点	13
5	研究の実際	14
	(1) 学力の向上に向けた主な取組	14
	(2) 体力の向上に向けた主な取組	17
	(3) 未来志向力の向上に向けた主な取組	18
	(4) 社会関係力の向上に向けた主な取組	20
6	分析と考察	22
	(1) 重点目標に関する達成度	22
	(2) コミュニティ・スクールの実働組織づくりに関する達成度	24
7	全体考察	24
8	成果と課題	25
<参考文献>		25

「人間力」を育成するコミュニティ・スクールの創造

～学校・家庭・地域をつなぐ「鍛える教育」を通して～

春日市立春日中学校

校長 古澤 裕二

1 主題設定の理由

(1) 国の文部行政施策から

平成27年8月、文部科学省から「教育課程企画特別部会における論点整理について」が出された。その要点は次の3点だと考える。

第一は、変化する社会における学校の位置づけである。2030年には、65歳以上の割合が総人口の3割に達し、生産年齢人口は総人口の約58%まで減少する。そのような中、これからの学校は、社会や世界と接点を持ちつつ、多様な人々とつながりを保ちながら学んでいく開かれた環境となることが不可欠である。またそのためには、教育課程も社会とのつながりを大切にす「社会に開かれた教育課程」が求められている。

第二は、我が国の子供たちの課題についてである。これまでの教育の成果を認めつつも、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること、実験結果を分析して解釈・考察し説明すること、自己肯定感、主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識などに課題があることが示されている。

第三は、これらを踏まえての今後の新学習指導要領の方向性についてである。今後生徒に身につけさせたい資質・能力を、次の「三つの柱」から整理している。

◇「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」

◇「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力）」

◇どのように社会・世界と関わり、よい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

また、これらの資質・能力を育成するために、「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラムマネジメント」を連動させた学校経営が求められている。「アクティブ・ラーニング」は、これまでの学習の在り方を問い直すもので、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」の中で、身につけた知識や技能を活用することが求められている。また、「学びに向かう力」が強調され、子供の学びへの興味と努力し続ける意志を喚起することの必要性が述べられている。「カリキュラムマネジメント」は、学校の組織及び運営についての見直しを迫るもので、具体的には教科横断的な視点やPDCAサイクルの確立、地域等の外部資源の活用といったことが求められている。

平成28年1月には、文部科学省から「『次世代の学校・地域』創世プラン」が出された。その中では、「地域とともにある学校」への転換を図るため、全ての公立学校がコミュニティ・スクールとなることを目指して取組を一層推進・加速すること。さらに、地域学校協働活動を推進するための新たな体制として、「地域学校協働本部」が整備されるよう教育委員会を支援

することなどが述べられている。

以上のことから、今後の学校教育においては、変化する社会の中でもよりよい人生を目指す主体性や人間性をもった生徒の育成が求められている。そのためには、学びも主体的・協働的なものでなければならない。また、学校は社会とのつながりを求めて、「社会に開かれた教育課程」の工夫やコミュニティ・スクールが推進されなければならないと考える。

(2) 福岡県や春日市が目指す教育から

平成27年12月、福岡県学校教育振興プランが出された。その中で示された「ふくおか未来人財」「ふくおか未来人財に求められる力」「福岡の学校教育の目標」は次の通りである。

◇「ふくおか未来人財」とは

「国際的な視野を持って、地域で活躍をする」若者のことである。

◇「ふくおか未来人財」に求められる力とは

①学力、体力、豊かな心 ②社会にはばたく力 ③郷土と日本、そして世界を知る力

◇「福岡県の学校教育の目標」とは

①社会的自立の基盤となる、学力、体力、豊かな心を培う。

②社会の変化に対応し、社会を支え、その発展に寄与する力を育てる。

また、学校教育の目標を実現させる方策として、「鍛ほめ福岡メソッド」が示された。これは、「鍛えて、ほめて、子どもの可能性を伸ばす」をコンセプトに、「目標設定の活動」「挑む活動」「振り返る活動」の3つの活動で構成される仕組みである。具体的には、子どもが「少し難しい目標や課題を設定し」、何度も「挑み」、取り組んだ過程や結果を「認められる」という仕組みである。この仕組みの特徴は2つある。第一は、子どもは達成感を味わうことで、次のチャレンジ意欲を向上させること。第二は、学校・家庭・地域が連携・協力した活動を行う際に、この仕組みを教員、保護者、地域住民等が共有して実践することで、活動の目的を常に意識できること、である。

一方、春日市では、「EDUCATION KASUGA（春日市の教育）」というリーフレットにおいて、目指す子どもの姿や施策の柱などを示しているが、平成28年度版には次のようなことが掲載されている。

○「共に育てる『共育』基盤の形成から学校を核とした協働のまちづくりへ」

○「知育・徳育・体育・食育の充実、市民性を持つ子どもの育成」

春日市は、平成17年度からコミュニティ・スクールを導入し、子どもを地域と共に育てる基盤づくりをはじめ、学校を中心としたまちづくりを目指してきた。また、今年度から教育目標として、「知育・徳育・体育・食育」に「市民性」の育成が付け加えられた。この「市民性」については特に解説はないものの、よりよい社会や地域の実現のために、まわりの人と積極的に関わろうとする意欲や行動力のことだと考える。コミュニティ・スクールを推進することによって、子どもにどのような資質や能力を育てるのかを明確にした点で意義は大きいと考える。

以上のように、福岡県や春日市の教育においても、知・徳・体だけでなく、「社会に寄与する力」や「市民性」といった総合的な人間としての資質や能力が求められている。そのためには、達成感を味わわせることによる生徒の主体的な学びやコミュニティ・スクールによる地域との連携が求められていると考える。

(3) 春日東中の生徒の実態から

① 学力の実態

【実態1】は、平成25年4月に実施した学力診断テストにおける各学年の偏差値である。これを見ると、全学年で県平均「50.0」を上回っている。また、生徒の学習状況を見ると、まじめに学習に取り組む生徒が多いと感じた。一方で、各教科による偏差値のバラツキが見られ、学校全体としての取組を行えばさらに学力は伸びると考えた。

	1年	2年	3年
偏差値	52	55	54

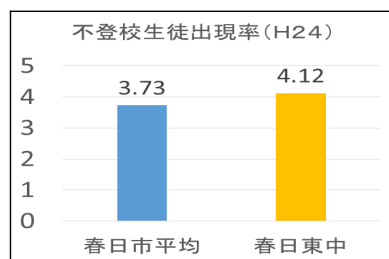
【実態1】学力診断テストの結果

② 体力の実態

【実態2】は、平成25年4月に実施した新体力テストにおける各学年・男女別のTスコア（偏差値）を表している。これを見ると、全学年男女とも、全国平均「50.0」を下回っている。また、【実態3】は、平成24年度の不登校生徒の出現率（不登校生徒数÷全校生徒数）である。市内中学校の平均を超え、約30名の不登校生徒がいる。生徒の状況を見ると、昼休みの外遊びが少なく、エネルギーが乏しい生徒も少なくないと感じた。そこで、運動の習慣化を行えば、体力の向上だけでなく、エネルギーアップにもつながると考えた。

	1年	2年	3年
男子Tスコア	46.3	46.0	47.3
女子Tスコア	45.4	48.0	48.1

【実態2】新体力テストの結果



【実態3】不登校生徒の出現率

③ 将来への展望

【実態4】は、平成25年7月に実施したキャリアアンケート（質問数12）うち、キャリアプランニング能力に関する質問内容と結果である。5段階評価で、各学年ごとの平均値を表している（最高値5）。これを見ると、低い数値ではないものの、どの学年も同レベルの「3.6~3.9」という数値で、学年が上がっても伸びが見られないことがわかる。そこで、計画的な進路学習や啓発的な体験活動を充実させれば、キャリアプランニング能力の向上につながると考えた。

【「キャリアプランニング能力」に関する質問】
 ○学ぶことや働くことの意義を考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来のつながりを考えたりしていますか。
 ○自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えていますか。
 ○自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。
 ※平成23年3月「中学校キャリア教育の手引き」文部科学省

	1年	2年	3年
学ぶことと働くことの意義	3.7	3.8	3.7
将来の目標と実現方法	3.6	3.7	3.7
目標に向けての努力	3.7	3.9	3.8

【実態4】アンケート質問内容と結果

④ 地域行事への参加状況

【実態5】は、平成24年度の1年間を通じて、生徒が地域行事へ参加した状況である。具体的な参加生徒数が把握できておらず、夏休みや冬休みに部活動単位で参加した程度だった。一方で、10の自治会ごとに「部伍会」という生徒組織があった。そこで、この「部伍会」を中心にうまく機能させれば、地域行事に参加する生徒数を増やすことができると考えた。

	平成24年度
地域行事への参加延べ人数	部活動単位での参加

【実態5】地域行事への参加状況

以上のような実態を踏まえて、何事にもまじめに努力するという春日東中生徒の長所を生かし、地域と連携した取組を充実させることによって、すでによい点はさらに伸ばし課題と思われる点は改善し、学校の重点目標の達成や組織づくりを行っていきたいと考えた。

2 主題の意味

(1) 「人間力を育成するコミュニティ・スクールの創造」とは

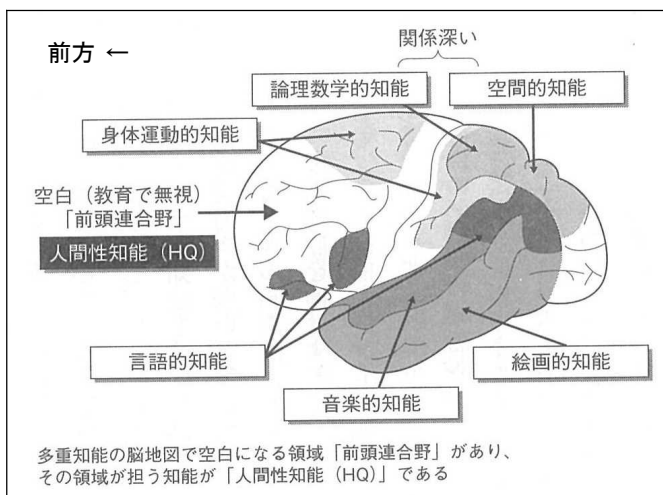
「人間力」とは、「学力・体力」をはじめとして「将来を展望する力（＝未来志向力）」や「社会に貢献する力（＝社会関係力）」といった人間としての総合的な力のことである。

「人間力を育成するコミュニティ・スクールの創造」とは、生徒の「人間力」を育成するために、コミュニティ・スクールの実働組織を創り上げることである。

人間の知能は少なくとも次の6種類に分けられる。

- ・言語的知能
- ・空間的知能
- ・論理的知能
- ・音楽的知能
- ・絵画的知能
- ・身体運動的知能

これらを「多重知能」と呼び、脳地図に描くと【資料1】のようになる。すると、おでこの裏側にどの知能にも属さない「空白」の領域があるが、これが「前頭連合野」と呼ばれる領域である。近年、この領域こそが、「人間らしさ」を



【資料1】多重知能と人間性知能の脳地図

司る高度な知能であることがわかってきた。脳科学者澤口俊之氏は、この知能を「人間性知能（Humanity/Hyper-Quotient、略してHQ）」と名付けた。この「多重知能」と「人間性知能」の関係をコンピュータにたとえると、各種アプリケーションソフトが「多重知能」、それらをうまく操作するウィンドウズなどのオペレーションシステム（OS）が「人間性知能」に相当する。OSがなければ各種アプリケーションソフトは機能しない。同様に「人間性知能」は「多重知能」を有用なものとして機能させる役割を担っている。また、「人間性知能」は、「未来志向性行動力（春日東中では生徒がわかりやすいように端的に「未来志向力」と呼ぶ）」と「社会関係力」の2つから成る。「未来志向性行動力」とは自己の将来を展望する力のことであり、「社会関係力」とは対人関係を築く力をはじめ、社会や他の人のために貢献する力のことである。澤口氏は、それらの力を【資料2】のようにまとめている。また、「人間性知能」がよく発達した人物像と発達不全の人物像についても【資料3】のようにまとめている。

未来志向性行動力	社会関係力
<ul style="list-style-type: none"> ・将来に向けた目的・展望・計画性 ・高度な思考力 (問題設定能力、問題解決能力) ・個性、主体性、独創性 ・好奇心、探究心 ・やる気、意志力、集中力、注意力 	<ul style="list-style-type: none"> ・理性、自己制御 ・共感性、協調性、利他性 ・心の理論(TOM)、社会の理論(TOS) ・高度な言語 (ネゴシエーションや説得など)

【資料2】未来志向性行動力と社会関係力の内容

澤口氏によると、これまで「人間性知能」が果たす役割がわからなかったため、教育界においては「多重知能」に関する諸能力、具体的には各教科等を通して育成する学力や体力に重きを置いてきた。しかし、「教育の目的

人間性知能(HQ)がよく発達	人間性知能(HQ)が発達不全
<ul style="list-style-type: none"> ○目的をもち、未来志向的で計画的。 ○「頭」がよく、問題解決能力が高い。 ○個性的で、独創的。 ○理性的で、協調的、利他主義。 ○優しく思いやりがある。 ○人間性豊かで、社会的に成功。 ○病気にかかりにくく、長生きする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●無計画で刹那的、「引きこもり」にも。 ●勉強はできても要領が悪い。 ●状況依存的で、人まね、指示待ち。 ●衝動的で、自分勝手、利己主義。 ●他人の心や「痛み」がよく分からない。 ●人間性が希薄で、社会的に失敗。 ●子供の頃のADHD、LD、CD(行為障害)。 ●統合失調症、各種人格障害。 ●うつ病、各種不安神経症。

【資料3】人間性知能の発達及び発達不全の人物像

（教育基本法第1条）」にある「人格の完成」の「人格」とは、脳科学の立場から言うと「人間性知能」そのものである、と言う。よって、教育を行うにあたって大切なことは、生徒の「多重知能」を向上させるとともに、「人間性知能」を十分に向上させることである。

また、「人間性知能」が、自己の将来を展望する力や社会に貢献する力から成ることを考えると、その育成には地域との連携が欠かせない。そこで、地域連携の方法を考えたとき、学識経験者、行政・地域・保護者・学校の代表者からなる「学校運営協議会」を設置した「コミュニティ・スクール」が最も有効なシステムであると考えられる。そのよさについてまとめると、

【資料4】の通りである。さらに、「学校運営協議会」を設置するだけでなく、具体的な連携を推進するコミュニティ・スクールの実働組織が必要となる。そこで、「家庭・地域連携を推進する実働組織」と「小中連携を推進する実働組織」の2つの実働組織を創り上げるよう考えた。

- 保護者や地域の意見を学校運営に反映させやすいこと。
- 校長の学校経営方針を地域に周知しやすいこと。
- 取組における「成果・課題」を共有しやすいこと。
- 学校運営協議会メンバーが学校関係者評価を行うため、外部評価の精度が高まること。

以上のことから、春日東中における学校教育目標、重点目標、具体的に目指す生徒像を次のように設定した。

【資料4】コミュニティ・スクールのよさ

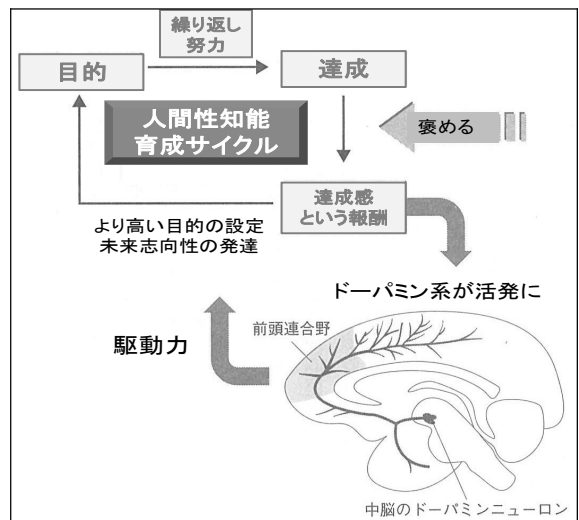
- 学校教育目標：「人間力を培い、地域に貢献できる生徒の育成」
- 重点目標：「学力・体力の向上」「未来志向力の向上」「社会関係力の向上」
- 具体的に目指す生徒像
 - ・「学力や体力を伸ばす生徒」
 - ・「将来の生き方や進路の実現を目指す生徒」
 - ・「社会のため人のために役立つ生徒」

(2) 「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』を通して」とは

「鍛える教育」とは、生徒に「やる気」という駆動力を生じさせるため、「目的の設定→繰り返し努力→達成→より高い目的の設定→繰り返し努力→達成・・・」というサイクルをつくり出す教育方法のことである。

「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』を通して」とは、学校・家庭・地域の三者に「鍛える教育」という一貫した教育方法を取り入れることである。

澤口氏によると、生徒自らが「目的の設定」を行い、目的達成に向けて「繰り返し努力」し、実際に目的を「達成」できたとき、「前頭連合野」で脳内伝達物質であるドーパミンが分泌され、「やる気」という駆動力が生まれると言う。この「やる気」という駆動力はさらなる「より高い目的の設定」、その後の「繰り返し努力」「達成」へとつながっていく。目的を達成したときに、他者から褒められれば、より強い駆動力となる。澤口氏は、この仕組みを【資料5】のように示して、「人間性知能育成サイ



【資料5】人間性知能育成サイクル

クル」と呼んだ。これは、言い換えると「成功体験」の積み重ねとも言える。これらのことを踏まえて、生徒は目標達成に向けて何度も繰り返し努力することが求められることからイメージして、「鍛える教育」と命名した。

この「鍛える教育」には、次のような「4つのよさ」がある。

- ①達成すべき目的を設定するところから始まるため、いつもゴールが明確であること
- ②各教科や学校行事、部活動等の教育活動全般において、同じ教育方法で一貫性をもたせることができること。
- ③「多重知能」とともに「人間性知能（特に未来志向力）」を高めることができること。
- ④十分に経験させれば（特に幼少期に）、「鍛える教育」のサイクルが脳の回路として形成され、生涯を通じて困難に負けない生き方ができること（「強制」というやり方は、強制する者がいなくなれば駆動力を失ってしまうため、真の駆動力になりえない）。

また、具体的な教育活動を考えた場合、目指すものの違い（最終的に目指すものは「目的」、さしあたって目指すものは「目標」と表記する）やそれぞれの特性などがあることから、澤口氏の理論を拡大解釈し、次の2点を「鍛える教育」の留意点とした。

- ①「目的の設定」は、生徒自身が設定する場合もあるが、教師が生徒に学ぶ必要性を実感させて設定する場合もあるということ。
- ②「繰り返し努力」は、生徒が何度も何度も繰り返して努力する場合もあるが、単に生徒が主体的な活動を行う場合もあるということ。

さらに、学校・家庭・地域の関係については、それぞれの役割を明確にしながらも、同じ「鍛える教育」という一貫した教育方法を取り入れる。具体的な三者の役割とは、次の通りである。

◇本校が目指す学校像：「人間力を鍛える」

「学力・体力を鍛える学校」「未来志向力を鍛える学校」「社会関係力を鍛える学校」

◇本校が目指す家庭像：「自立心を鍛える」

「考えさせる家庭」「行動させる家庭」「責任をとらせる家庭」

◇本校が目指す地域像：「社会性を鍛える」

「目標を共有化する地域」「生徒の出番・役割を与える地域」「生徒のよさを認める地域」

「鍛える」というキーワードをもとに三者の役割を明確にしたが、互いに重なり合う部分があり、「自立心」は「人間力」の未来志向力へと、「社会性」は「人間力」の社会関係力へとつながるものだと考える。

3 研究の目標

生徒の「学力・体力」「将来を展望する力（＝未来志向力）」「社会に貢献する力（＝社会関係力）」といった人間としての総合的な力、「人間力」を育成するコミュニティ・スクールを創り出すため、次の教育方法や具体的な取組の有効性、組織づくりの進捗状況を明らかにする。

- ①学校・家庭・地域をつなぐ「鍛える教育」の有効性
- ②「鍛える教育」の基盤づくりとして「運動の効果的活用」の有効性
- ③「鍛える教育」の環境づくりとして「コミュニティ・スクールの実働組織づくり」の進捗状況

4 研究の構想

(1) 学校経営の視点

① 視点その1：「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』」の具体化

学校経営の重点目標を達成するために、「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』」を具体化していった。その際、「ミッションリーダーシップ（権限委譲型マネジメント）」と言われる手法を用いる。具体的な内容は次の通りである。

○校長は達成すべき目標とその理由、期限などを、主幹や主任・主事といったミドルリーダーにミッション（使命）として伝える。

○ただし、達成すべき目標に至るための具体的な方法は、ミドルリーダーの各個人に任せ、校長は、必要に応じて質問や相談に答え、アドバイスをを行う。

○ミドルリーダーは、自分を中心とする各校務分掌組織のチーム内で、校長からのミッションを解決する方法を検討し、校内の運営委員会において提案する。

○運営委員会で承認されれば、ミドルリーダーが中心となって実行に移す。実行後、前・後期でその方法の有効性をチェックし、各校務分掌組織のチーム内で改善策を検討する。

この手法は、校長の学校経営方針を具体化する手法であり、ミドルリーダーの人材育成の手法であり、校内分掌組織（チーム）を機能化する手法であり、「鍛える教育」の考え方を応用したものである。

実際に、ミドルリーダーに与えたミッションの例は、

【資料6】に示す「教育の重点」「経営の重点」に関する4つの項目中の「ア～ソ」である。

【教育の重点】	
教育課程の編成・実施・評価・改善	
ア	日報による情報の周知徹底
イ	CSSの充実
ウ	週テスト実施の共通方針
エ	5時間授業の週2日実施
オ	地域ボランティア活動への参加体制強化
カ	「偏差値」についての保護者啓発
キ	生徒が主体的に取り組む体育的・文化的行事
ク	「晴動雨読」における運動の充実
ケ	「晴動雨読」における朝読書の充実
コ	キャリア教育の充実
サ	サクセスノートの充実
シ	各教科における「鍛える教育」の授業づくり
ス	各教科における能力アッププランの作成
セ	通常学級における特別支援のマニュアル化
ソ	特別支援学級における個別支援の充実

【経営の重点】		
校務分掌組織・学年組織の効率化と内容の充実	教職員の人材育成	小学校、家庭・地域と連携したコミュニティ・スクールの推進
ア 校務分掌部会や学年部会の内容チェック	ア 研修会、発表会への参加、論文への応募、長期研修への派遣	ア CSSの取組とPTA組織の取組との連動
イ 時間戦略（多忙解消）の周知	イ 不祥事防止対策の日常化	イ PTAや地域と連携した未来塾・校内環境整備の充実
ウ 危機管理マニュアル等の再検討	ウ ミッションによる主任主事の育成	ウ まかせん会の再生
エ 東中「いじめ防止基本方針」の見直し	エ 自己目標の設定や実践、自己評価の具体化	エ 東中コミュニティ推進委員会への参加体制の強化
オ 校舎完成に伴う校内環境整備	オ 「職員集団の3箇条」の実践	オ 学校通信・コミュニティペーパーの充実
カ 異学年による校内清掃（校舎完成まで保留）	カ データの共有化、職務の効率化	カ 学校HPの充実
キ 「懲戒・生徒指導対応マニュアル」の付加修正	キ 外部への授業研究公開、授業参観の推進	キ 学校予算の創出
ク 部活動の活性化、内規の設定	ク 主題研究・一般研修等の全体計画の見直し	ク 家庭・地域との連携事業の充実
ケ 生徒会活動の全職員への周知	ケ 主題研究の理論・具体的な例示の付加	ケ 福岡女学院大学との連携事業の充実
コ ノーチャイム実施に伴う校内放送整備	コ 個人のまとめ、教科部会の充実	コ 部伍会の充実、地域行事への参加強化
サ 校内掲示物のチェック体制の充実	サ 指導技術向上の方策提案	サ ボランティア部の充実
シ 学年部会の効率化、責任の明確化	シ 主題研究と学力向上プランの連動・周知	シ 小中連携の取組の充実
ス 学活（SEL-8S）等の参観授業の活発化	ス 同教科・同学年による参観授業の推進	ス 体力テストの小中合同実施の検討
セ 「鍛える教育」による学年・学級経営	セ 一般研修のテーマ・内容の充実	セ 小中サミットの内容充実
ソ 副任の関わり方について各学年で統一	ソ 部活動指導に関する研修会の実施	ソ 部活の充実、保護者との連携強化

【資料6】ミドルリーダーに与えたミッションの例（平成27年度学校経営要綱より）

また、ミドルリーダーが提案・実践した重点目標を達成するための取組のうち、「研究の実際」で紹介する「主な取組」は【資料7】の通りで、各重点目標ごとに3つの取組とする。

- ・学力の向上：「サクセスノート」の取組、「CSS（放課後学習）」の取組
「課題達成学習」の取組
- ・体力の向上：「晴動雨読」の取組、「保健体育科における補強運動」の取組
「部活動の活性化」の取組
- ・未来志向力の向上：「計画的な進路学習」の取組、「啓発的な体験活動の充実」の取組
「家庭的教育力パワーアップ宣言」の取組
- ・社会関係力の向上：「地域行事への参加」の取組、「地域人材活用」の取組
「対人係育成プログラム（SEL-8S）」の取組

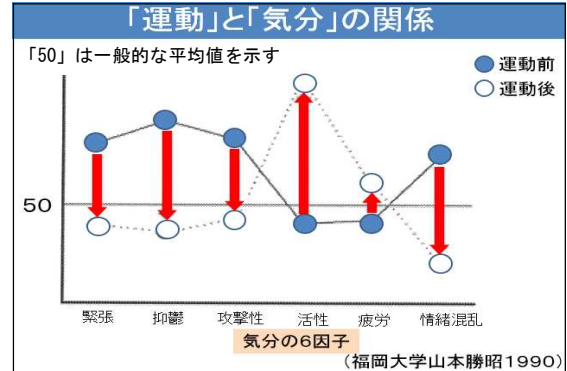
【資料7】「鍛える教育」を具体化した主な取組

② 視点その2：「運動の効果的活用」の具体化（「鍛える教育」の基盤づくり）

不登校傾向や精神的な不安定さ、ストレスに対する弱さなどを生徒に感じることが少なくない。そのため、「鍛える教育」を推進するうえでの基盤づくりとして、「運動の効果的活用」を具体化していった。

「運動の効果的活用」の導入に至った理由は2つある。第1は、春日東中の学校運営協議会会長である福岡大学名誉教授山本勝昭氏（スポーツ心理学）による「運動と気分」に関する研究成果である。それによると、一般的に

「気分」と呼ばれるものは、「緊張」「抑鬱」「攻撃性」「活性」「疲労」「情緒混乱」の6因子からなる。山本教授は自身の研究の成果として、「気分」の6因子が、適度な運動によって、よい方向にシフトし改善されることを指摘している。具体的には、適度な運動によって、



【資料8】 運動と気分の関係

【資料8】のように高い状態だった「緊張」「抑鬱」「攻撃性」「情緒混乱」という精神的な不安定さを示す4因子は下がり、「活性」という反応の活発さを示す因子は大きく上昇し、「疲労」という疲れを示す因子はほどよく感じられる状態となる。

第2に、ハーバード大学のレイティ教授の「運動とメンタルヘルス」に関する研究成果である。それによると、「運動とメンタルヘルス」の関係は【資料9】のようにまとめられている。これ以外にも、適度な運動によって、脳由来神経栄養因子というものが盛んに作り出され、脳の神経細胞や血管形成を促すこと、認知能力を高める神経結合を増やすこと、ドーパミン・セロトニン・ノルアドレナリンといった神経伝達物質の分泌を促すこと、海馬が大きくなることなど、適度な運動が脳にもたらす好影響についても述べている。達成感を味わうと分泌されるドーパミンは、適度な運動によっても分泌される。また、適度な運動を具体化する時の条件として、レイティ氏は「心拍数を上げる」「普段使わない筋肉を使う」「できれば朝にやる」という3条件をあげている。

運動とメンタルヘルスの関係

- ①適度な運動は脳の良好な学習環境を準備する。
- ②適度な運動は気分などストレスを軽減する。
- ③適度な運動はうつや不安を低減する。
- ④適度な運動はやる気を高める。
- ⑤適度な運動は認知や注意の集中力などの機能を活性化する。

（ハーバード大学ジョンJ・レイティ、2007）

【資料9】 運動とメンタルヘルスの関係

以上のように適度な運動の習慣化は、体力の向上は勿論のこと、生徒のエネルギーアップをもたらしとともに、学習への準備を促し脳に好影響を与えるものとして期待できると考える。そこで、具体的には、平成25年度冬季に1ヶ月間早朝ランニングを導入し、平成26年度から年間を通して通常朝自習を行う時間帯に「晴動雨読」という時間を導入した。詳しくは後述するが、晴天時は運動、雨天時は朝読書を行う取組である。

③ 視点その3：コミュニティ・スクールの実働組織づくり（「鍛える教育」の環境づくり）

「鍛える教育」を推進するうえでの環境づくりとして、コミュニティ・スクールの実働組織づくりに取り組んだ。具体的には、「家庭・地域連携を推進する実働組織」と「小中連携

を推進する実働組織」を創るため、平成25年度以降に【資料10】のような経緯で実働組織づくりを行ってきた。

そこで、まず「家庭・地域連携を推進する実働組織」について、【資料11】に示す「春日東中コミュニティ・スクール運営組織図」で説明したい。資料の上部が「東中コミュニティ協議会（学校運営協議会）」である。また、下部が実働組織である「東中コミュニティ推進委員会」である。この組織は、具体的には「地域担当」教員と「地域実行委員会」の生徒、「地域代表」が毎月1回打ち合わせを行う会である。その

際、必要に応じて「PTA代表」の保護者や「大学生代表」の福岡女学院大学の大学生が参加した。また、福岡女学院大学とは日常的な連携の必要性から、連絡・調整には「地域担当」教員があたった。「地域実行委員会」は、10の自治会の「部伍長」や部伍長から選ばれた「地域実行委員長」、「ボランティア部部長」で構成する。「地域実行委員会」は、必要に応じて「地域担当」教員と連携・協議を行った。

「東中コミュニティ推進委員会」という実働組織のよさは、「部伍長」と「地域代表者」が、直接打ち合わせを行う点である。その結果、【写真1】のように、後日「部伍長」が「部伍会」を招集し、地域行事の目的の確認や参加体制について部伍会全員で話し合うという流れである。そのため、生徒が主体となって、部伍会メンバー全員が責任をもって地域行事に参加する仕組みとなった。また、地域行事への参加後には、「部伍長」が必要に応じて「部伍会」を招集し、反省会を行った。

【平成24年度までの取組】

- 学校運営協議会の設置(学識経験者、行政・地域・保護者・学校の代表で構成)
- 自治会ごとに全生徒が参加する「部伍会」組織の設置(部伍会数10)

【平成25年度の取組】

- 職員の校務分掌組織の見直し
- 学校運営協議会を「東中コミュニティ協議会」へと名称変更
- 生徒有志によるボランティア部の設置(当初女子8名でスタート)
- 生徒会組織に「地域実行委員会(部伍長・ボランティア部部長で構成)」を設置
- 「コミュニティ・スクール春日東中ブロック共育構想」の作成
- 春日東中ブロックにおける「三部会」の定期開催の開始
- 福岡女学院大学との連携事業の実施
- 学校独自のHP、コミュニティペーパーを作成し地域へ情報発信

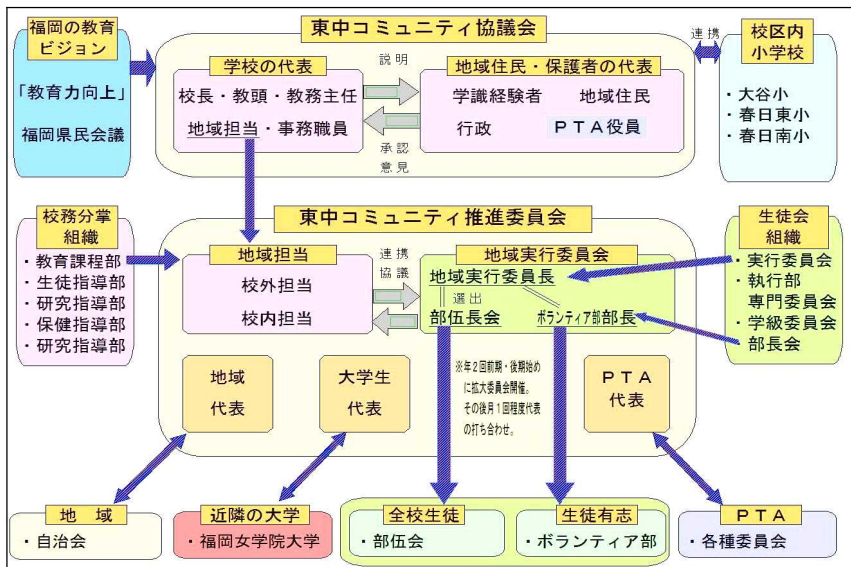
【平成26年度の取組】

- 実働組織「東中コミュニティ推進委員会」の設置
- 福岡女学院大学以外の大学生との連携

【平成27年度の取組】

- OPTA規約の検討及び変更、PTA組織をPTCA組織へ移行
- (「C」はコミュニティの略、地域の有志が加入できるようにした。)

【資料10】「コミュニティ・スクールの組織づくり」の経緯

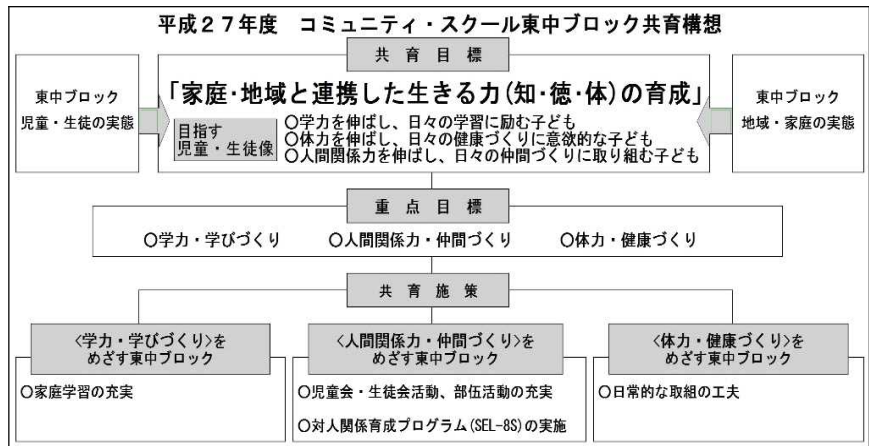


【資料11】コミュニティ・スクール春日東中の運営組織図（平成26年度）



【写真1】東中コミュニティ推進委員会から部伍会への流れ

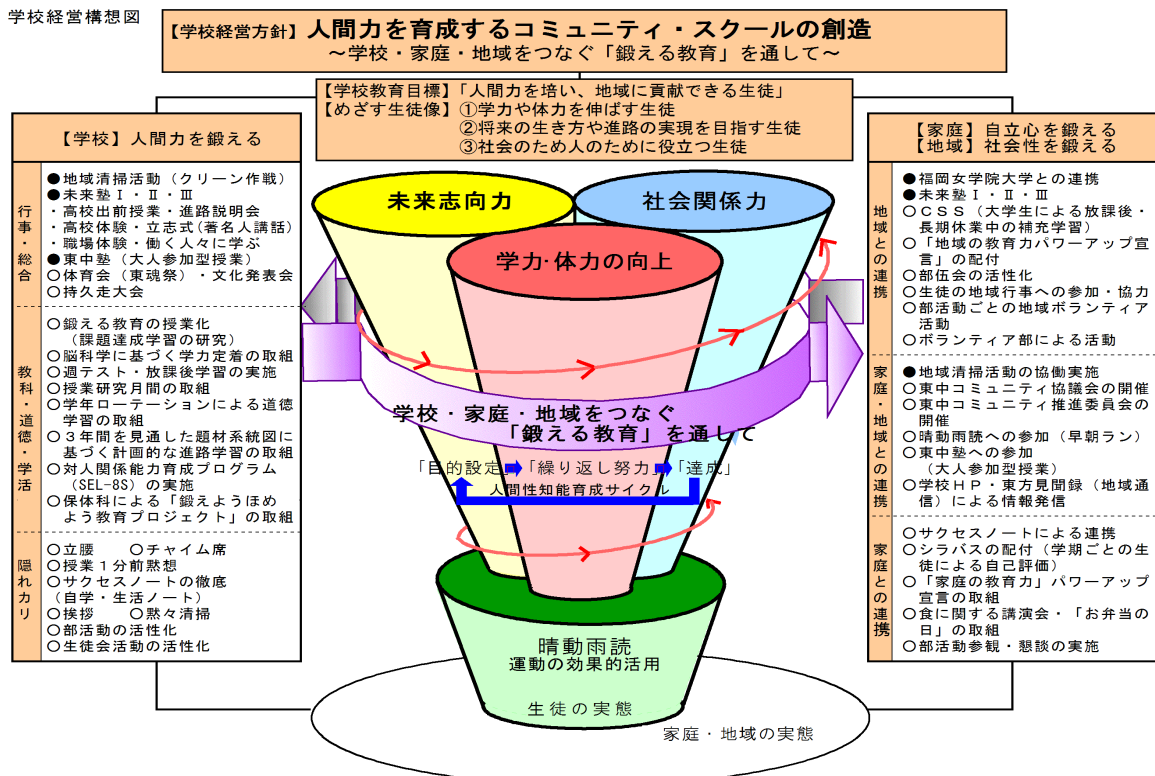
次に、「小中連携を推進する実働組織」についてである。具体的には、【資料12】のような「コミュニティ・スクール東中ブロック共育構想」を作成し、共育目標・共育施策の共有化を図り、3つの重点目標にもとづいた「三部会」という実働組織を創った。三部会は、年4回各小・中学校の担当者から成る組織で、具体的な取組内容や成果・課題、改善策について話し合った。具体的な共育施策は、「学力・学びづくり」部会は家庭教育の充実、「人間関係力・仲間づくり」部会は児童会・生徒会活動・部伍活動の充実と、対人関係育成プログラム (SEL-8S) の実施、「体力・健康づくり」部会は運動の日常的な取組の工夫である。



【資料12】東中ブロック共育構想（平成27年度版の一部）

(2) 学校経営構想図

学校経営の3つの視点にもとづく学校経営構想図は【資料13】の通りである。「人間力」の3つの柱「学力・体力」「未来志向力」「社会関係力」を中心に据え、それらを支える基盤づくりの部分に「運動の効果的活用」が担う。また、両サイドに位置する学校と家庭・地域において「鍛える教育」という一貫した教育方法によって三つの柱が太くなり、学校教育目標や目指す生徒像に向けて伸びていく、という構想図である。。さらに、一貫した教育を支える環境づくりの部分として「コミュニティ・スクールの実働組織」が陰で担っている。



【資料13】平成26年度 学校経営構想図

(3) 検証の視点

① 「検証の視点」その1：重点目標に関する達成度

重点目標として掲げた「学力・体力」「未来志向力」「社会関係力」がどれくらい向上したかを明らかにすることによって、「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』」及び「運動の効果的活用」の有効性について明らかにする。

② 「検証の視点」その2：コミュニティ・スクールの実働組織づくりに関する進捗状況

毎年行っている「教職員による学校評価（質問数74）」のうち、【資料14】に示す「コミュニティ・スクールの実働組織づくり」に関する質問に対する結果がどのくらい向上したかによって、進捗状況を明らかにする。

項目	具体的な質問内容
家庭・地域連携を推進する実働組織づくり	ア 機能的なCS推進組織を具体化し、充実を図ることができたか。
	イ 部伍を活性化し、生徒の地域行事への参加を充実させることができたか。
	ウ 家庭と連携した地域行事への参加を充実させることができたか。
小中連携を推進する実働組織づくり	エ 近隣大学と連携し、中・大連携の取組の充実を図ることができたか。
	オ 三部会を通して、小・中の情報連携と共通実践を充実させることができたか。

【資料14】「コミュニティ・スクールの組織づくり」に関する質問内容

③ 「検証の視点」の具体化

「検証の視点」その1・その2を整理したものが【資料15】である。その際、A基準「理想とする数値」、B基準「平成26年度以上の数値」、C基準「平成25年度以上の数値」、D基準「平成25年度未満の数値」という評価基準を設け、達成度を4段階で評価する。

検証の対象項目	主な取組【連携した取組】	検証するための具体的なデータ	平成27年度の達成目標の数値
重点目標に関する達成度	学力	・学力診断テストの偏差値 ・家庭学習の時間	【A基準】・偏差値60以上 ・家庭学習1・2年2時間・3年3時間 【B基準】・平成26年度以上 【C基準】・平成25年度以上
	体力	・晴動雨読【小中連携】 ・保健体育科の補強運動 ・部活動の活性化	【A基準】・Tスコア75以上 ・Aランク人数150名以上 ・不登校出現率1.0台 【B基準】・平成26年度以上 【C基準】・平成25年度以上
	未来志向力	・計画的な進路学習 ・啓発的な体験活動の充実 ・家庭の教育力パワーアップ宣言【家庭との連携】	・キャリアアンケートの結果 【A基準】5段階評価で平均4.0以上 【B基準】・平成26年度以上 【C基準】・平成25年度以上
	社会関係力	・地域行事への参加【地域との連携】 ・地域人材活用【地域との連携】 ・対人関係プログラム(SEL-8S)【小中連携】	・地域行事への参加延べ人数 ・自治会長さんからの評価 ・アセスの対人適応 ※アセスの対人適応とは、「教師との関係」「友人関係」「友だち関係をつくるスキル」「無視やいじわるなど、拒否・否定的な友だち関係」の4項目からなる。 【A基準】 ・アセスの対人適応58以上 ・地域行事への参加延べ人数2100名以上 ・学校の教育活動への参加延べ人数300名以上 ・自治会長さんからの評価(4段階)で6項目とも3.5以上 【B基準】・平成26年度以上 【C基準】・平成25年度以上
	コミュニティ・スクールの実働組織づくりに関する進捗状況	・家庭・地域連携を推進する実働組織づくり ・小中連携を推進する実働組織づくり	・教職員による学校評価(4段階評価)

【資料15】検証方法の具体化

④ 外部による評価の活用

- 重点目標に関する達成度については、学校関係者評価委員（学校運営協議会委員と小学校代表）による外部評価を平成25年度と27年度で比較し、重点目標の向上に対する意識の変化を明らかにする。
- コミュニティ・スクールの実働組織づくりに関する達成度については、【資料16】の項目から成る「コミュニティ・スクールの進捗状況調査（市教委が教職員と学校運営協議会委員を対象に行った）」の結果を、市内小中学校と比較し進捗状況を明らかにする。

・コミュニティ・スクールの認知度 ・学校の目標・課題の共有化 ・コミュニティ・スクールの組織と運営 ・学校と保護者・校区民との双方向の関係構築 ・開かれた教育関連状況 ・全体評価
--

【資料16】「進捗状況調査」の項目

5 研究の実際

(1) 学力の向上に向けた主な取組

① 「サクセスノート」の取組

「サクセスノート」とは、【資料17】に示す独自に作成した「学習・生活ノート」のことである。主体的・効果的な家庭学習を日々行い、努力を怠らないことが自らを「人生の成功」に導くという意味から「サクセスノート」と名付けた。その特徴は3つある。

第1は、「キャリアシート」で、2カ月ごとに将来の職業とそこへ至る道筋、具体的な進学先、現在の達成目標と努力目標を記入させた。「鍛える教育」の視点から、将来への展望を日々の学習の目的意識へつなぐことをねらいとした。

第2は、【資料18】に示す「授業の振り返りシート」で、その日にあった授業内容を忘れないうちに振り返るシートである。具体的な記入の手順については、次の通りである。

a 準備タイム (5分)

その日に習った教科の教材教具、サクセスノート、筆記用具を準備する。

b 思い出タイム (15分)

その日に学んだ授業の学習内容を何も見ずに思い出し、シートに記入する。

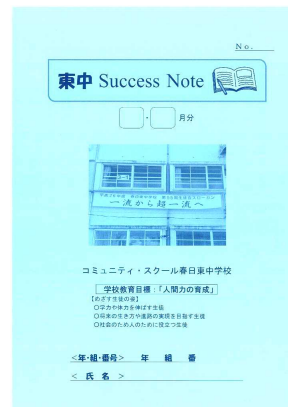
c 点検タイム (30分)

思い出せない部分、曖昧な部分を教材教具を見て確認し、加筆・修正を加える。

d 復習タイム (40分)

理解できていないところや暗記しておかねばならないところについては、「自学ノート」を使って学習を深める。

また、「鍛える教育」の視点から、その日あった授業の「目的意識・努力・達成感」について自己評価させた。さらに、不十分な点を復習させるため、【資料19】に示す「自学ノート」を次項に設け、「今日の家庭学習のめあて」を記入させ自学の目的を明確にしたうえで取り組ませた。



【資料17】サクセスノート

1時間目	めあて アモニウムが水に溶ける前後の質量がどうなるか推測しよう。
教科名	理科
【授業内容】	水酸化ナトリウムと塩化アンモニウムが水に溶ける前後の質量変化の様子を調べる。 $\text{NH}_4\text{Cl} + \text{NaOH} \rightarrow \text{NH}_3 + \text{H}_2\text{O} + \text{NaCl}$
反応前の質量	71.1(g)
アモニウム発生	90.2(g)
水に溶ける	71.1(g)
目的	4-3-2-1 努力 4-3-2-1 達成 4-3-2-1

【資料18】授業振り返りシート

Can	must = have to
Canの用法	mustの用法
Canの過去形	mustの過去形
Canの未来形	mustの未来形
Should	Should I? Shall we?
Shouldの用法	Should I? Shall we?の用法
Shouldの過去形	Should I? Shall we?の過去形
Shouldの未来形	Should I? Shall we?の未来形

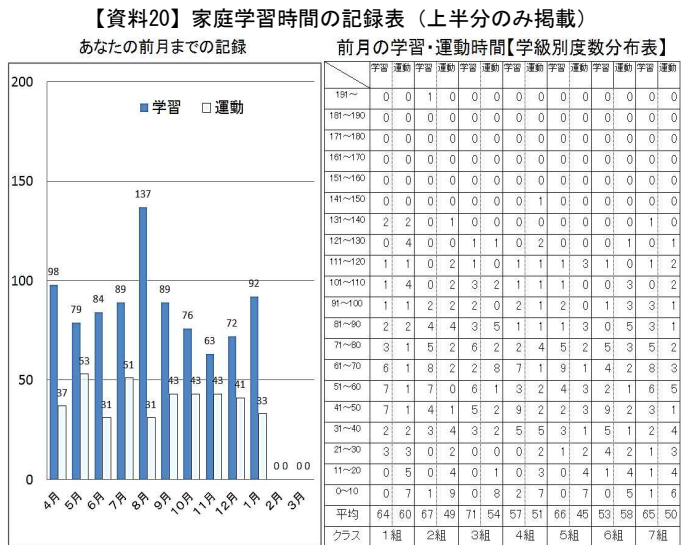
【資料19】授業振り返りシート (A4版1ページ)

第3は、【資料20】に示す「家庭学習時間の記録表」である。「鍛える教育」の視点から、家庭学習の時間について自己目標を設定し、その後は学習した教科や学習時間を日々記録していき、週ごと月ごとに合計させた。その努力の結果を【資料21】に示す「個人・学年データの個票」として、全生徒に配付した。この個票には次のデータを示してある。

学校の教育目標	人間力の向上	めざす生徒像	① 学力・体力を伸ばす生徒						具体的な自己目標			
			② 将来の生き方を探求する生徒						学習時間	平日: 120分	運動時間	平日: 45分
			③ 社会や地域に貢献する生徒						学習時間	休日: 180分	運動時間	休日: 75分
日	学習した教科(復習した教科に○を記入する)						学習時間 (10分単位)	運動時間 (10分単位)	就寝時刻	睡眠時間	手洗い (○・×)	
	国語	数学	社会	理科	英語	その他						
1	○	×	○	○	○	○	12	9	12時30分	6時間	○	
2	○	○	×	○	×	○	12	6	12時30分	5時間	○	
3	○	○	○	○	○	○	19	6	1時00分	6時間	○	
4	○	×	○	×	×	○	12	9	12時30分	7時間	○	
5	○	×	×	○	○	○	7	3	12時30分	8時間	○	
6	○	×	○	○	○	○	23	6	1時00分	10時間	○	
7	○	○	○	○	○	○	26	3	2時30分	5時間	○	
小計							109分	42分				
8	○	×	○	○	○	○	17	3	1時45分	7時間	○	
9	○	○	○	○	○	○	13	3	1時30分	6時間	○	
10	○	○	○	○	○	○	25	6	1時00分	5時間	○	
11	○	○	○	○	○	○	12	2	1時00分	7時間	○	

- 生徒個人の家庭学習時間について、月合計時間の変化を示すグラフ。
- 同学年生徒全員の家庭学習時間について、月合計時間の度数分布表。

このような「努力の見える化」を図ることによって、前月の家庭学習時間の自己記録を更新しようとする意欲や、他の生徒の家庭学習時間を超えようとする意欲を高めることがねらいである。この個票には、自己の努力を振り返る欄や、家庭と連携するためのコメント」欄も設けた。



【資料21】個人・学年データの個票

「三部会」による小中連携の共有施策として、各小学校高学年においても、家庭学習の充実を図るために自学ノートの使用が始まった。

② 「CSS (放課後学習)」の取組

生徒の主体的な学習を促すため、また個のニーズに応じた指導を行うため、放課後学習を職員室前の廊下で行った。この場所を選んだのは、「頑張っている姿を教師に見てもらいたい」「個人的な疑問はすぐに教師に聞きたい」と生徒が考えたと推測したからだ。この放課後学習を「CSS (コミュニティ・スクール・スタディ)」と呼んだ。名称は、教員だけでなく、大学生や地域人材の活用を見越してのことだった。担当教員は、国語・数学・英語の教員の中から各学年1名ずつ選び、他の部活動と同じようにCSSを位置づけた。このCSSの特徴は、教師の指示によって参加する生徒、個別の支援を要する生徒もいるが、多くは生徒自身が目的意識をもって主体的に学習しに来る点である。主体的に努力した結果、成果ができれば再び学習しに来るというよい循環ができ、【写真2】のように毎日30~40人程の生徒が職員室前で学習した。テスト前にはさらに増え、朝早く登校し学習する生徒もいた。



【写真2】CSS (放課後学習)の様子

③ 「課題達成学習」の取組

校内研修の主題は「できる生徒を育てる授業の創造」、副主題は「教科の特性を生かした課題達成学習の工夫を通して」であった。

「課題達成学習」とは、「鍛える教育」の視点に立った学習で、1時間の学習における行動目標を明確にし、繰り返し努力（主体的な活動）し、生徒が目標を達成した喜びを感じる学習のことである。「課題達成学習」は、終末の達成感を重視する学習であり、達成感が次時の学習への強い動機付けとなると考えた。

そこで、具体的な1時間の学習過程を【写真3】のように設定し、各段階の内容を示すと次の通りである。



【写真3】英語科（2年生）における課題達成学習の様子

◆単元名 「Lesson3 For Our Future」

◆Today's Goal

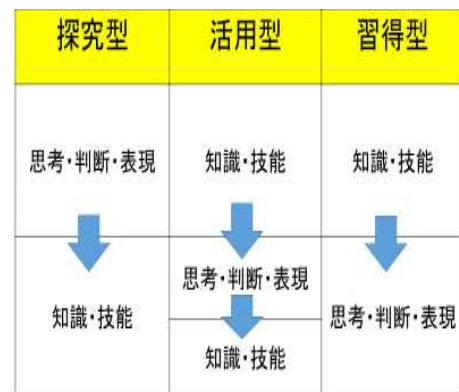
「未来形を用いて、修学旅行のプランをたずね、友達の予定を表現できるようになる。」

◆「目的意識をもつ」段階

- 生徒が1時間の授業で何ができるようになればよいのかといった行動目標を確認したり、なぜこの学習内容を学ぶ必要があるのかを把握したりすることで、生徒が目的意識をもつ段階である。ただし、担当教師の一方的なゴール設定にならないように留意した。
- 「めあて」を「Today's Goal」「今日のゴール」というカードで示し、具体的には「<学習活動>を通して、<行動目標>できるようになる。」という表現で提示した。

◆「繰り返し努力する（主体的な活動）」段階

- 行動目標の達成に向けて、教科の特性に応じて生徒が繰り返し努力したり、あるいは主体的な活動を行ったりする段階である。
- この段階における学習の流れは、【資料22】のような探究型・活用型・習得型を担当教師は意識した活動を仕組んだ。具体例をあげると、「探究型」では「探究する活動→まとめる活動」、「活用型」では「既習事項を確認する活動→既習事項を活用する活動→まとめる活動」、「習得型」では「説明を聞く活動→習得する活動」などの学習の流れである。



【資料22】「繰り返し努力する」段階における学習の流れ

- 学習した内容をアウトプットさせ、評価基準に照らして評価する。

◆「達成した喜びを感じる」段階

- さらに生徒がわかった・できたということを確認し、達成感を味わう段階である。
- 具体的には、発表やまとめ、確認・発展問題への取組、学習の振り返りなどである。

(2) 体力の向上に向けた主な取組

① 「晴動雨読」の取組

年間を通して月～木曜日の週4日間、通常朝自習を行う10分間に晴天時は運動、雨天時に読書を行った。運動の内容は、レイティ氏が指摘した通り、【写真4】のような心拍数を上げる早朝ランニングを基本に、多様な運動を取り入れる観点から、または新体力テストで課題種目を克服する観点から、腹筋や反復横



【写真4】早朝ランニングの様子

跳びなども取り入れた。その中で、「鍛える教育」の視点から、走る距離や実施回数の目標を設定させ、特に走行距離は日々サクセスノートに記録させた。また、学年で走行距離の目標を設定し、掲示物で「努力の見える化」に取り組んだ。12月には、努力の成果を実感できるよう持久走大会を開催した。「三部会」による小中連携の共育施策として、各小学校においても、中休みの時間を活用するなどして運動の日常化を進めた。

② 「保健体育科における補強運動」の取組

課題達成学習を行う中、男子は導入時の5分間に補強運動を取り入れた。これは、「鍛える教育」の視点から、新体力テストに向けて目的意識をもたせ、【写真5】のような連続ジャンプ、連続ジャンピング腕立て伏せを中心に取り組ませたものである。素早い伸張性筋収縮（筋肉が伸びながら筋力を発揮すること）の直後に、短縮性筋収縮（筋肉が縮みながら筋力を発揮すること）をさせる「プライオメトリクス」と呼ぶトレーニングである。そのよさは、短時間でより大きな筋力を発生しやすく、筋肉よりも腱（筋肉の両端にあって骨と付着している部分）の発達が促されるため、発達段階に適していた。学年に応じて負荷の強さや実施回数を変えた。一方女子は、導入時にラジオ体操の徹底に取り組んだ。



【写真5】連続ジャンプの様子

③ 「部活動の活性化」の取組

部活動（特に運動部）の取組は、以前からまさに「鍛える教育」の考え方そのものである。県大会優勝などの大きな目標を掲げ、日々繰り返し努力し、達成感を味わう。一方で、大会までに時間的な余裕がある場合など、目的意識が薄れたり日々の努力が低下したりする。そこで、部活動生全体のスローガンを「裏を鍛えれば表が輝く」（挨拶やルールを守ることなど日常生活をきちんとやるのが、部活動の好成績につながるという意）を掲げ、部活動の活性化に向けた次のような取組を行った。

- ・部活動生の意識向上のため、月1回定期的に「部活動生集会」を開催した。内容は【写真6】のような挨拶練習や卒業生の講話などである。
- ・部活動の活動状況を把握するため、年2回「校長・部長連絡会」を開催した。その中で、各部活動の目



【写真6】部活動生集会（挨拶練習）の様子

的意識や日々の努力等について各部長に自己評価させ、【資料23】に示すシートに記入させた。各部の問題点や解決策、活性化に向けた提言も行わせた。

- ・練習時間の確保のため、保護者会と連携して11月～3月までの冬場の部活動時間を延長した。
- ・部費の不足分を補うため、好結果を出した部活動に報奨金を与えた。
- ・体の成長を促すため、朝練習の後と放課後練習の前に、おにぎりやパン等の補食を許可した。

部活動名 ()	記載者 ()
チェック項目	記述・評価
① あなたの部活動は何をめざしていますか。目標を書いてください。	【記述】
② 部員全員が①の目標を意識できていますか。評価しましょう。	【評価】 とても 大体 あまり 全く 4 3 2 1
③ 部員全員が目標に向かって一生懸命に日々部活に取り組んでいますか。評価しましょう。	【評価】 とても 大体 あまり 全く 4 3 2 1
④ ③の評価の理由は、具体的に部員のどのような姿からですか。書いてください。	【記述】
⑤ あなたの部活動における問題点を書いてください。	【記述】

【資料23】部活動評価のシート（上半分のみ掲載）

- ・【写真7】のように福岡大学スポーツ科学部から年1回講師を招き、教員向け部活動指導者研修を実施した。

冬季の部活時間の延長と報奨金制度については、「校長・部長連絡会」における各部長からの提言によって始めたものである。



【写真7】福岡大学米沢利広教授による研修

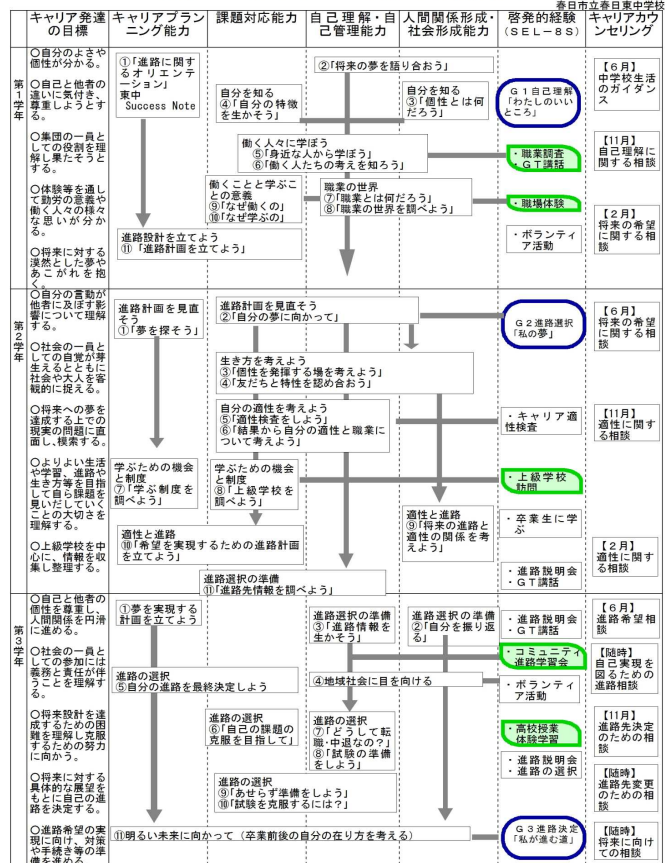
(3) 未来志向力の向上に向けた主な取組

① 「計画的な進路学習」の取組

「鍛える教育」を行ううえで、キャリア教育は大変重要である。それは、様々な教育活動の目標やその達成に向かう日々の繰り返しの努力は、将来の自己実現という最終的な目的達成へとつながるものだからである。そのため、生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てる「キャリア教育」を充実させなければならない。その際、3年間を見通した計画的な進路学習が重要であると考えた。

そこで、【資料24】のようなキャリア教育の題材系統図を作成した。具体的にはこれにもとづいて、各学年の進路指導部担当から、いつ、どのようなテーマ・資料を使って授業するかが提案され、各学年で学級活動の時間を使

平成28年度キャリア教育の題材系統図



【資料24】キャリア教育の題材系統図（平成28年度に向けて作成）

って進路学習を実践した。これにより、3年生はもとより1・2年生においても約10時間の計画的な進路学習を行い、これまで担任任せだった進路学習の学級間格差がなくなった。また、年1回進路学習の全体研修を行い、進路学習の指導向上を図った。

② 「啓発的な体験活動の充実」の取組

キャリア教育における啓発的な体験活動の充実についても取り組んだ。これは、出前授業として著名人を派遣する機関「エンジン01文化戦略会議」と連携して、著名人を春日東中に招聘することが可能になったものである。具体的には、2年生の立志式に併せて、【写真8・資料25】のような著名人を招き、ご本人の生き方について話を伺うことができた。

また、啓発的な体験活動を1年早く前倒しで実施した。これは、将来の職業や進路に関する意識を早めに生徒に意識付けすることがねらいである。具体的には、従来2年生で行う職場体験を1年生で、3年生で行う上級学校体験を2年生で実施した。



【写真8】有森裕子さんによる講演

- 【平成26年度】
- ・有森裕子さん(マラソンメダリスト)
 - ・金哲彦さん(陸上・駅伝解説者)
 - ・石毛宏典さん(元プロ野球選手)
- 【平成27年度】
- ・河口洋一郎さん(CGアーティスト)
 - ・小林宏之さん(航空評論家)
 - ・和田秀樹さん(精神科医)

【資料25】来校し著名人

③ 「家庭の教育カパワーアップ宣言」の取組

これは、夏休み・冬休み・春休みの長期休業に向けて、各家庭に【資料26】のようなB4裏表のリーフレットを配付し、依頼した取組であった。具体的には、「鍛える教育」の視点から、生徒が保護者と話し合っただけで長期休業中における目標を設定し、達成に向けて繰り返し努力し、保護者がその達成度を評価(A～Dの4段階)するとともにコメントを記入するというものであった。

その他、このリーフレットには、目標を立てる上で参考となる春日東中生徒の実態を示すデータ、「自立心」チェックシート、保護者が果たすべき役割などを掲載した。休み明けに担任に提出し、保護者のコメント等は担任が学級通信を通して再び各家庭へとフィードバックさせた。

「鍛えよう！子どもの自立心」の具体的な取組

「福岡のビジョン」や「東中生徒の生活実態調査結果」、日頃のお子さんの様子をもとに、次の取組をお願いします。

- ご家庭でお子さんと話し合っ、夏休み期間中のお子さんの「日々の目標」を設定させ、その目標達成に向けて努力するように促してください。具体的な手順は次の通りです。
【手順】
①目標を決める際、生徒と保護者の方で十分に話し合いを行いましょう。
②目標が決まったら、生徒本人に目標を記入させましょう。
③記入したら、この用紙を家族みんなが見えるところに掲示しましょう。
④目標達成に向けて努力をしているか、定期的(1週間ごと)に家族で振り返りましょう。
- 夏休み最終日に、実際にお子さんの目標が達成できたかどうか、保護者の方がA～Dの4段階評価を行い、感想をご記入ください。目標を達成していれば是非褒めてあげてください。
- この用紙は、お子さんを通じて9/2(月)に学級担任へ提出してください。

A (とても達成することができた)
B (大体達成することができた)
C (あまり達成することができなかった)
D (全く達成することができなかった)

		夏休み期間中の目標	評価
記入例	その1	・毎日1時間、小説を読む。(本人が興味・関心をもっていること)	A
	その2	・毎日3時間以上、勉強する。(中学生としてやるべきこと)	B
	その3	・携帯電話は夜9時以降は親に預ける。(家庭のルールに関すること)	C
	その1		
	その2		
	その3		
	その4		
	その5		

【保護者のご感想】

【資料26】「家庭の教育カパワーアップ宣言」(一部)

(4) 社会関係力向上の取組

① 「地域行事への参加」の取組

教育課程外の地域行事については、【資料27】に示すリーフレットを各自治会に配付し連携した。内容は、生徒の社会性を育成するため、地域で中学生の出番や役割を与えてほしいという依頼や春日東中の学校教育目標、具体的な地域活動の例などである。これにより各自治会は、中学生の出番や役割を増やす取組を行ってくれた。一方、教育課程内においても、地域行事への参加を促した。具体的には、自治会ごとに行われる春日市「秋のクリーン作戦」への参加である。この取組には、PTA代表から保護者への呼びかけも行い、学校・家庭・地域の三者による協働作業として位置づけた。参加に際して、生徒は「地域行事参加カード」を持参し、「鍛える教育」の視点から、【資料28】に示す6項目を自己評価し感想をカードに記入した。自治会長さんからは参加の証としてカードに押印してもらい、同様の項目で生徒の活動を評価してもらった。評価結果は、「地域担当」教員がまとめ、東中コミュニティ協議会において報告した。

② 「地域人材活用」の取組

生徒が地域に出るだけでなく、保護者や地域の方が学校の教育活動に参加する取組も行った。具体的には、「東中塾」の取組である。これは、総合的な学習の時間を活用して、【資料29・写真9】のように教員が一人一講座を設けて（毎年約20講座）、多様なテーマのもと異学年集団で学ぶ課題達成学習であると同時に、保護者や地域の方もゲストティーチャーや生徒

コミュニティスクール春日東中

「地域の教育力」パワーアップ宣言

「鍛えよう！子どもの社会性」の取組のお願い

本校では「地域や社会、人の役に立つ生徒」の育成を目指し、学校で「人間力」を鍛える。家庭で「自立心」を鍛える。地域で「社会性」を鍛えるといった、「鍛える」という言葉をキーワードにしたコミュニティスクールの取組を展開しています。お陰様で、昨年は延べ人数977人の生徒が地域行事に参加し、全国平均を上回ることができました。今年度さらに延べ人数1000人を目標に生徒の地域行事への参加を促していきます。生徒に地域での出番や役割を与え、「集団における協調性」「対人関係における適切な対応」等の社会性の育成をお願いできればと考えています。

趣旨をご理解のうえ、「鍛えよう！子どもの社会性」の取組に是非ともご協力いただき、地域の教育力のさらなるパワーアップにもつなげていただければ幸いです。

〇春日東中生徒の実態調査結果（経年変化、全国との比較）【対象】東中3年生

質問「今住んでいる地域の行事に参加していますか？」

学年	参加している	たまに参加している	あまり参加していない	全く参加していない
春日東中(H24)	23%	40%	34%	4%
春日東中(H25)	20%	29%	32%	20%
全国(H25)	17%	25%	28%	31%

春日東中が考える「目指す地域像」とは？

① 目標を共有化する地域
 ② 生徒の出番・役割を与える地域
 ③ 生徒の安全を見守る地域

【本校が目指す生徒像】
 ○学力や体力を伸ばす生徒 ○将来の生き方や進路の実現を目指す生徒 ○社会のため人のために役立つ生徒

【取組例】

- ① 地域行事の支援
 - 夏祭りの会場準備
 - 敬老会の会場準備
 - 自治会運動会の補助
 - スポーツフェスタの補助
- ② 小学生への指導
 - 出前授業
 - ラジオ体操
 - 寺子屋（学習会）
 - 花まる先生
- ③ 地域行事への参加
 - 餅つき
 - 収穫祭
 - 七夕祭り
 - 記念行事
 - 料理教室
- ④ 地域の貢献活動
 - 街頭募金
 - 清掃活動
 - 挨拶運動
 - 廃品回収

◆学校への依頼・連絡について
 問い合わせ先：春日東中 副教務（地域担当）本田 実美で（TEL：581-1109）

【資料27】地域の教育力パワーアップ宣言

- ① 目的意識をもって参加できたか
- ② 時間を守ることができたか
- ③ 地域の方に挨拶することができたか
- ④ 地域の方の話を聞くことができたか
- ⑤ 主体的に行動することができたか
- ⑥ 達成感を味わうことができたか

【資料28】地域行事における評価項目

東中塾の講座一覧

番号	担当名	コース名
1	櫻井	書道に親しもう
2	木田	百人一首
3	湯島	歴史能力検定を取得しよう
4	花田	DVDを作ろう
5	吉塚	数学パスル
6	小橋	ユニット折り紙で多面体をつくらう
7	加茂	ゴルフを楽しもう
8	伊藤	ソフトボールをさわめよう
9	風木	卓球
10	坂東	そばん
11	田中	お茶教室
12	西川	語の体験・豆知識を増やそう 人権ってなんだろう
13	高木	番の外遊びで汗をかこう
14	中野	3×3バスケットボール塾
15	西村	ヒップホップダンス
16	藤井	フットサル
17	守江	日本オテテッポウをしよう
18	後藤	アイデア豊画～東中カラフル大作戦～
19	栗田	アナコンダ・顔絵で表現力をみがこう
20	北村	英語講座
21	小田	手話を学ぼう



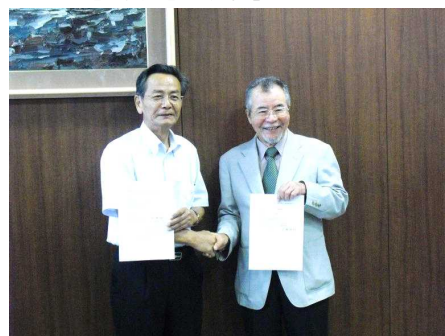
【資料29】講座一覧（平成25年度） 【写真9】「東中塾」の様子

とともに学ぶ学習者として参加する大人参加型授業であった。保護者や地域の方の募集については、募集要項を作成し保護者へ配付するとともに、各自治会へは回覧を通じて募集した。

また、この取組に際して、福岡女学院大学との中・大連携も行った。具体的には、【写真10】のように福岡女学院大学の大学生が「英語」講座を担当し、毎回授業を行った。その他、長期休業中の補充学習支援、教科・道徳の実習授業、授業のサポート、学校行事や部活動の支援など中・大連携を発展させた。因みに、春日東中と福岡女学院大学との中・大連携が契機となり、【写真11】のように平成25年には春日市教育委員会教育長と福岡女学院大学長との調印へと発展した。調印内容は、市内小中学校は教員を目指す大学生を受け入れること、大学は市内小中学校の支援を行うという内容だった。



【写真10】「英語」講座の様子



【写真11】調印式の様子

③ 「対人関係育成プログラム (SEL-8S)」の取組

「社会関係力」の基礎は、一対一の対人関係の能力である。よりよい学級や学校をつくるには、対人関係を築くことへの目的意識をもたせ、日常的・継続的な取組を行う必要があると考えた。そこで、福岡教育大学（小泉令三教授）が中心となって推進する社会的な能力を育む「対人関係育成プログラム (SEL-8S)」を取り入れた。このプログラムは、①自己への気づき、②他者への気づき、③自己のコントロール、④対人関係、⑤責任ある意思決定、⑥生活上の問題防止のスキル、⑦人生の重要事態に対処する能力、⑧積極的・貢献的な奉仕活動という8つの能力からなっていた。そこで、平成25年度は各学年3テーマを実践し、次年度から

H27 SEL-8S 年間計画			
日程	1年生	2年生	3年生
4月	(A1)同級生への挨拶 「どうぞよろしく」	(A1)同級生への挨拶 「どうぞよろしく」	(A5)下級生や大人への挨拶 「状況に合った挨拶」
5月	(A2)規範遵守 「私たちの生徒規則」	(C2)責任ある意思決定 「はっきり断ろう」	(C6)意思伝達 「上手な教え方」
6月	(B1)他社理解 「聞く&話す」	(A4)整理整頓 「道具の管理」	(D4)協力関係 「ストップ! いじめ」
7月	(D1)協力関係 「いろんな意見」	(C6)意思伝達 「初対面での話し方」	(E1)ストレス認知&対処 「ストレスマネジメントI」
9月	(E1)ストレス認知&対処 「ストレスマネジメントI」	(B2)自己理解 「短所を乗り越える」	(G1)進路 「"私"のいいところ」
10月	(B2)自己理解 「短所を乗り越える」	(D6)男女の協力関係 「男らしさ・女らしさ」	(D2)問題解決 「友達が怒っちゃった」
11月	(D2)問題解決 「友達が怒っちゃった」	(E1)ストレス認知&対処 「ストレスマネジメントI」	(D6)関係づくり 「携帯電話のマナー」
12月	(F1)万引き防止 「ダメ! 万引き」	(D3)携帯電話 「顔の見えないコミュニケーション」	(F3)精神衛生 「ポジティブに考えよう!」
1月	(D4)問題解決 「ストップ! いじめ」	(E2)ストレス認知&対処 「ストレスマネジメントII」	(E2)ストレス認知&対処 「ストレスマネジメントII」
2月	(H1)学校ボランティア 「学校のミニボラ?」	(F2)喫煙防止 「タバコってカッコいい?」	(A6)金銭感覚 「"見えないお金"の使い方」
3月	(G1)自己理解 「私のよいところ」	(G2)進路選択 「私の夢」	(B3)他者理解 「私への思い」

【資料28】SEL-8S年間計画

様々なプログラムから生徒の実態や発達段階を踏まえて各学年で11テーマを選んで【資料28】に示す年間計画を作成し、本格的な実践を行った。毎回、計画にもとづき各学年の研究指導部担当から、いつ、どのようなテーマ・資料で授業を行うか提案され、【写真12】のように道徳の時間を使って実践した。「三部会」による小中連携の共育施策として、各小学校においてもこのプログラムを実践した。



【写真12】1年生題材「いろんな意見」授業の様子

6 分析と考察

(1) 重点目標に関する達成度

① 学力の向上

【データ1】は、学力診断テストにおける偏差値の推移である。これを見ると、3年生は「52→57」、2年生は「55→58」、1年生は「56→60」へと全学年とも入学時から大きく学力が向上した。また、各年度の入学時の数値だけを比較すると、「52→55→56」と年度を追うごとに数値が上がった。また、【データ2】は、1年間を通しての家庭学習（塾の学習を含む）の平均時間を表している。年度で比較すると、1年生「1.58→1.91→2.00」、2年生「1.50→1.68→2.10」、3年生「2.70→2.96→3.30」へと年度を追うごとに家庭学習の時間も増加した。

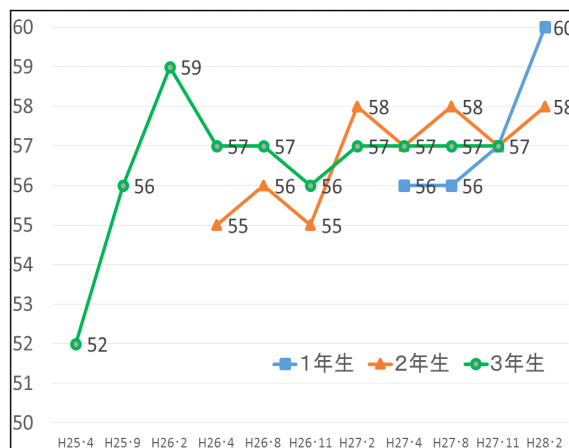
以上のことから、主な取組は有効だったと考える。

② 体力の向上について

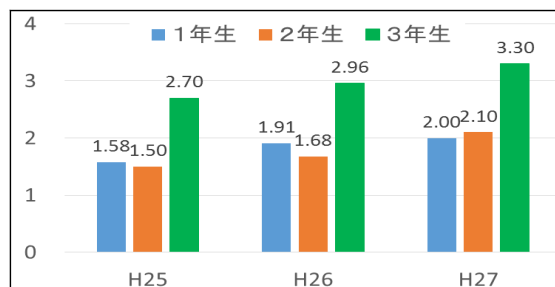
【データ3】は、新体力テストにおけるTスコアの結果である。これを見ると、3年生男子は「46.3→57.4」、3年生女子「45.4→53.3」、2年生男子は「48.3→53.7」、2年生女子は「46.9→50.6」へと男女とも大幅に向上した。また、各年度の入学時の数値だけを比較すると、男子は「46.3→48.3→49.9」、女子は「45.4→46.9→51.4」と男女とも年度を追うごとに向上した。また、生徒の個人成績はA～Eの5段階で評価されるが、

【データ4】はAランクの生徒数の推移である。これを見ると、「70→99→200」と大幅に増加した。また、【データ5】は、不登校生徒の出現率（不登校生徒数÷全校生徒数）を示している。比較すると「4.12→3.06→2.37→2.67」と、平成27年度に若干増えたものの平成24年度と27年度を比較すると「-1.45」で、これは不登校生徒約10名の減少にあたる。

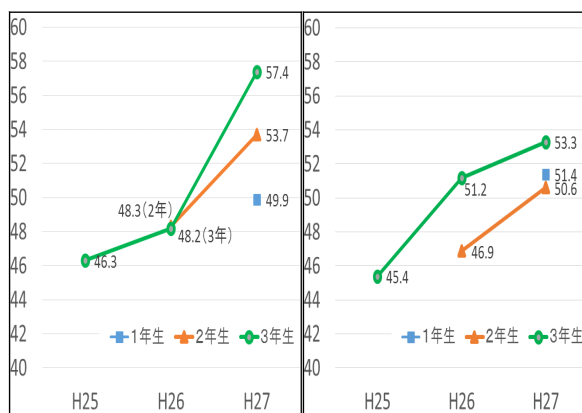
以上のことから、主な取組が有効だったと考える。因みに、平成27年度「第29回毎日カップ中学校体力つ



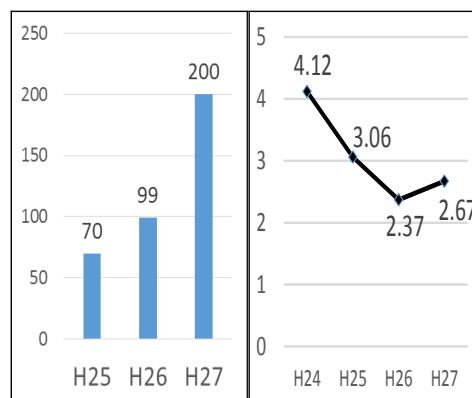
【データ1】偏差値の推移



【データ2】家庭学習の平均時間（1年間を通して）



【データ3】Tスコアの推移（左：男子、右：女子）



【データ4】Aランクの生徒数の推移（男女の合計数）

【データ5】不登校生徒の出現率

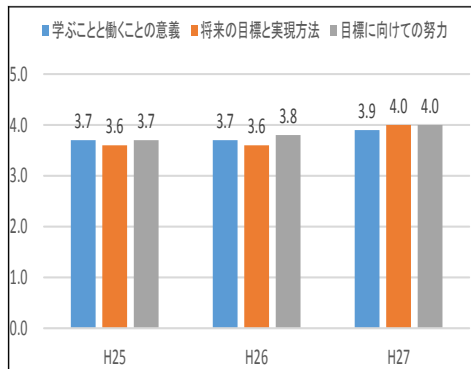
くりコンテスト」において、生徒の著しい体力向上や学校全体の組織的な取組が評価され、【写真13】のように全国からエントリーした4423校の中で実質全国第4位にあたる「日本学校体育研究連合会賞」に輝いた。



【写真13】毎日カップ表彰式の様子

③ 未来志向力の向上

【データ6】は、キャリアプランニング能力に関する結果である（質問内容はP5「実態4」参照）。昨年度3年生の入学時である平成25年度から27年度までを比較したもので、5段階評価の平均値を示している。これを見ると、2年時のデータに伸びがないものの、1年時より3年時のほうが「3.7→3.9、3.6→4.0、3.7→4.0」と3項目とも向上し、トータルで「+0.9」になっていた。

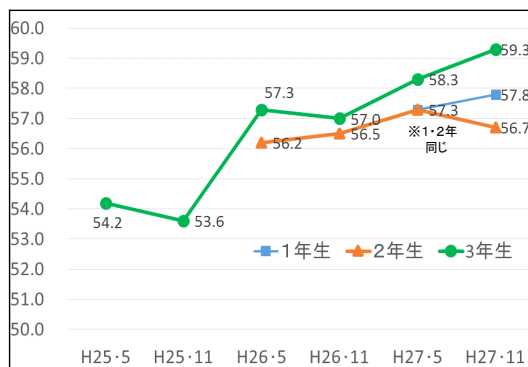


【データ6】キャリアアンケートの結果

以上のことから、主な取組が有効であったと考える。2年時のデータに伸びがないのは、主な啓発的な体験活動が調査後に行われたからだと考える。

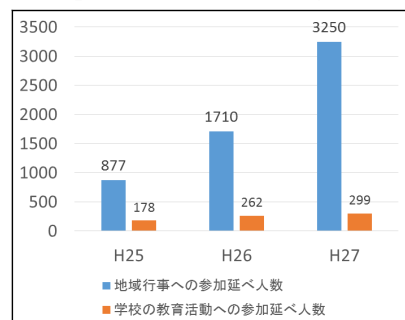
④ 社会関係力の向上

【データ7】は、アセスの対人適応に関する結果である。「50」が全国平均である。これを見ると、3年生は「54.2→59.3」、2年生は「56.2→56.7」、1年生は「57.3→57.8」へと全学年とも入学時より向上した。また、各年度の入学時の数値だけを比較すると、「54.2→56.2→57.3」と年度を追うごとに数値が上がった。また、【データ



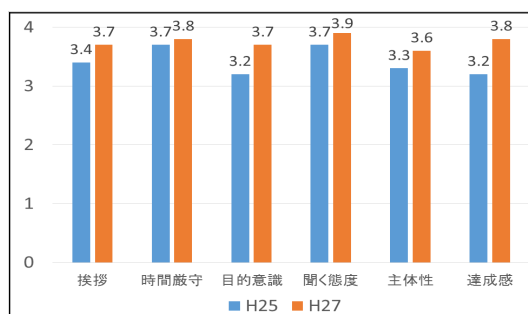
【データ7】アセスの対人適応の結果

8】は地域行事への生徒の参加延べ人数と保護者・地域の方が学校の教育活動に参加した延べ人数を表している。これを見ると、生徒の地域行事への参加延べ人数が「877→1710→3250」へ大幅アップし（市内中学校の地域行事への参加延べ人数の平均は1355名）、地域から学校の教育活動への参加延べ人数は「178→262→299」と増えた。さらに、



【データ8】参加延べ人数の変化

【データ9】は自治会長さんからの評価を示している。自治会長さんからの評価についても、どの項目も「0.1～0.6」向上した。

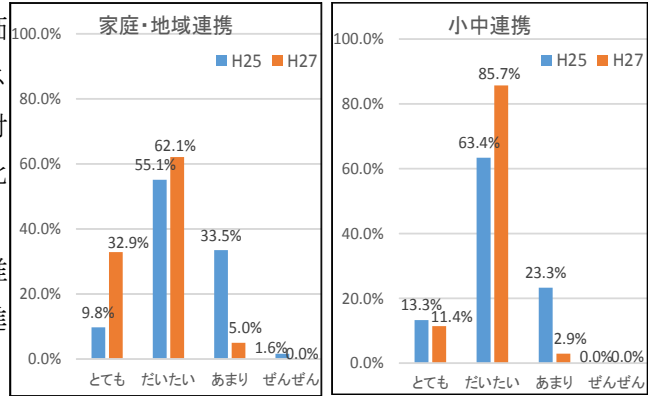


【データ9】自治会長さんからの評価

以上のことから、主な取組が有効だったと考える。因みに、ボランティア部は、自治会と連携した独居老人への自宅訪問等の活動が認められ、今年度公益財団法人「ソロプチミスト日本財団」から表彰されることが決まった。

(2) コミュニティ・スクールの実働組織づくりに関する進捗状況

【データ10】は、「教職員による学校評価（質問数74）」のうち、「コミュニティ・スクールの実働組織づくり」に関する質問に対する結果について、平成25年度と27年度と比較したものである（質問内容はP13「資料14」参照）。結果は、「家庭・地域連携を推進する実働組織づくり」と「小中連携を推進する実働組織づくり」の2つから表しており、「家庭・地域連携を推進する実働組織づくり」は4つの質問から成っているので平均値である。4つの



【データ10】教職員による学校評価の結果

質問に関する詳細は【データ11】の通りである。グラフを見ると、「とても・だいたい」の値が、「家庭・地域連携を推進する実働組織づくり」は「64.9→95.0」、「小中連携を推進する実働組織づくり」は「76.7→97.1」と増えた。

		とても	だいたい	あまり	ぜんぜん
ア	H25	10.0%	40.0%	50.0%	0.0%
	H27	20.0%	74.3%	5.7%	0.0%
イ	H25	12.9%	64.5%	22.6%	0.0%
	H27	54.3%	45.7%	0.0%	0.0%
ウ	H25	6.5%	48.3%	38.7%	6.5%
	H27	28.6%	68.5%	2.9%	0.0%
エ	H25	9.7%	67.7%	22.6%	0.0%
	H27	28.6%	60.0%	11.4%	0.0%

以上のことから、教職員の意識として、コミュニティ・【データ11】「家庭・地域連携」データの詳細スクールの組織づくりが以前に比べて推進できたと感じていることがわかる。

7 全体考察

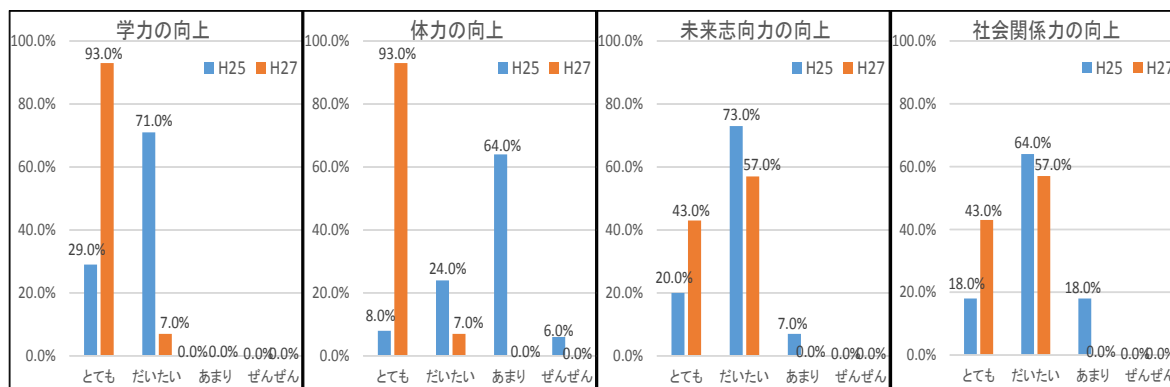
以上の結果から、「人間力」の育成につながる「学力・体力」「未来志向力」「社会関係力」といった重点目標に関して、十分な向上が図られたことがわかる。また、コミュニティ・スクールの実働組織づくりに関しても十分推進できたことがわかる。それを裏付けるために、さらに評価基準にもとづく評価や外部からの評価を使って検証したい。

【データ12】は、平成27年度の重点目標を評価基準にもとづき評価したものである（評価基準はP13「資料15」参照）。対象の21項目のうち、A評価11項目、B評価9項目、C評価1項目、D評価ゼロだった。また、【データ13】は、重点目標に関する取組を学校関係者評価委員が外部評価した結果を、平成25年度と27年度で比較

目標	評価項目	評価			
		※学年がないものは全生徒対象又は保護者・地域が対象			
学力	偏差値	1年:A	2年:B	3年:B	
	家庭学習時間	1年:A	2年:A	3年:A	
体力	Tスコア	2年男子:B	2年女子:B	3年男子:A	3年女子:B
	Aランク人数	A			
	不登校出現率	C			
未来志向力	キャリアアンケート	3年生:B			
社会関係力	アセスの対人適応	1年:B	2年:B	3年:A	
	地域行事への参加延べ人数	A			
	学校の教育活動への参加延べ人数	B			
CSの組織づくり	自治会長さんの評価	A			
	教職員による学校評価	家庭・地域連携の実働組織:A		小中連携の実働組織:A	

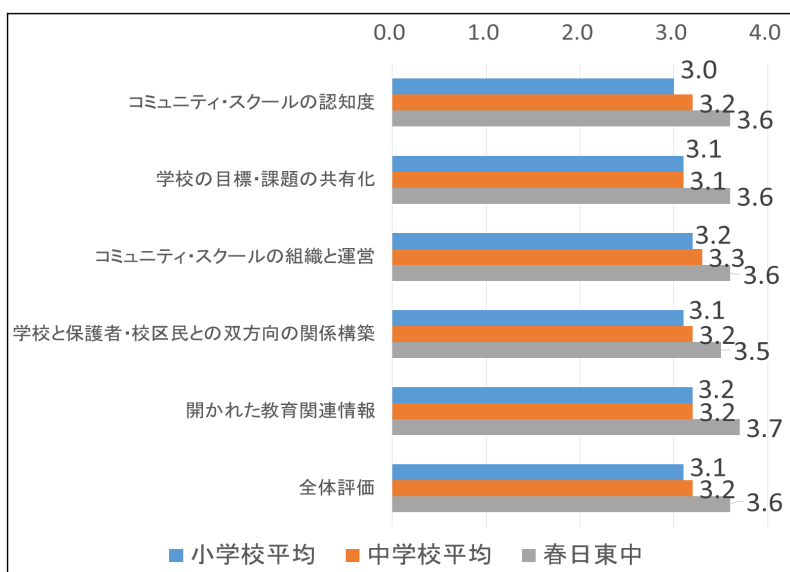
【データ12】評価基準にもとづく評価の結果

したものである。「とても・だいたい」の値ではどちらも100%になる項目があることから、「とても」の値に絞って比較してみると、「学力の向上」は「29→93」、「体力の向上」は「8→93」、「未来志向力の向上」は「20→43」、「社会関係力の向上」は「18→43」と増えた。学校関係者評価委員が、すべての重点目標に関する取組が有効であると感じていることがわかる。特に、客観的データの変容が明確に出る「学力」「体力」については高い評価だった。



【データ13】学校関係者評価委員による外部評価の結果

さらに、【データ14】は、市教委による「コミュニティ・スクール進捗状況評価（4段階）」の平成27年度の結果である。春日東中の進捗状況は、市内小・中学校の平均「3.1、3.2」を上回る「3.6」で、市内で最もよい評価だった。また、平成25年度の全体評価が「2.4」であったことから比べると、大きく推進されたことがわかる。



【データ14】コミュニティ・スクール進捗状況評価

8 成果と課題

(1) 成果

- 「学校・家庭・地域をつなぐ『鍛える教育』」「運動の効果的活用」は、重点目標の達成や人間力の育成に大変有効であった。
- 「鍛える教育」は、学校における様々な教育活動だけでなく、家庭・地域との連携においても大変有効な方法であり、一貫性を持たせることでさらに効果が上がるとわかった。
- 「運動の効果的活用」は、体力向上だけでなく、生徒のエネルギーアップに有効であることがわかった。
- 「コミュニティ・スクールの実働組織づくり」を推進できたこと、同時に重点目標の達成や具体的な連携を有効なものにするためには実働組織づくりが不可欠であることがわかった。

(2) 課題

- 「未来志向力」が期待するほど伸びず、進路学習の内容について充実を図りたい。
- 不登校の出現率低下に向けて、さらに小中連携の取組について充実を図りたい。

<参考・引用文献> 「『学力』と『社会力』を伸ばす脳教育」 澤口俊之著 講談社
「脳を鍛えるには運動しかない」 ジョンJ・レイティ 日本放送出版協会
「教育課程企画特別部会における論点整理について」 「『次世代の学校・地域』創世プラン」 「中学校キャリア教育の手引き」 文科省

